

序章 分析の枠組み

講義の課題：帝国に対してギリシア人がどのように対応したのか。

対象：都市から個人のレベルまでの次元

周辺諸民族との関係

異民族の脅威に対して民族的に大同団結する伝統の欠如

ギリシア世界の空間的広がり→現地住民との関係

外部世界からの文化的影響

前七世紀の「東方化時代」

前五世紀

傭兵としての文化的接触

サイス朝エジプト：アブシンベル寺院の落書き

ペルシア人に仕えるギリシア人の存在

ギリシア人政治家による接近

ポリスの次元での接近

異民族の脅威に対抗する同盟結成の動き

デロス同盟：ペルシアに対する報復を目的

アゲシラオスの小アジア遠征

ギリシア世界の中の帝国と都市

異民族に対する軍事行動の背景：指導権、忠誠の確保が目的

アテナイ：デロス同盟のアテナイ帝国化＝同盟国の奴隷化

スパルタ：リュサンドロスの帝国

同盟国間の連帯の希薄さ

タソスやサモスの離反→多くは単独行動

ミュティレネ事件：ポリスの中の対応も一様でない

スパルタ帝国の事例：レウクトラ以降

政治行動の規範

政治行動の規範は何か

原理・原則が存在していたのか

近代歴史学の考え方

ポリス共同体とギリシア民族共同体への共属意識は絶対的
政治的自由＝異民族に対する文化的優越性の根拠
ホールの研究：ペルシア戦争以降の時期に拡大

J. M. Hall, *Hellenicity: Between Ethnicity and Culture*,
Chicago/ London, 2002.

ギリシア人：「智 (sophia)」、「勇気 (andreia)」、
「正義 (dikaiosyne)」

バルバロイ：「愚かしさ (amathia)」、「怯弱 (deilia)」、
「不正 (adikia)」

バルバロイとの共存は不可能

これらの判断に絶対的基準があるわけではない

バルバロイとの対峙でなく、別な価値基準の存在
＝ポリスの利益

何が国益か？

ポリス内部の党派：有力政治家を核に結ばれる私的なつながり

党派の利害がポリスの利害に擦り変えられている

アテナイ帝国をめぐる論争

サント=クロワ：G. E. M. de Ste Croix, “The Character of
the Athenian Empire”, *Hist.* 3, 1954/55, pp. 1-41.

ブラディーン/クイン：D. W. Bradeen, “The Popularity of
the Athenian Empire”, *Hist.* 9, 1960, pp. 257-269.

T. J. Quinn, “Thucydides and the Unpopularity of the
Athenian Empire”, *Hist.* 13, 1964, pp. 257-266.

久保正彰、「内乱の思想 -文学者の歴史研究-」、

『成蹊大学文学部紀要』二、一九六六年、

百五十六～百八十四頁

田中美知太郎、『ツキュディデスの場合』、筑摩書房、
一九七〇年、百三十一～百五十六頁

論争の遺産：

政策決定の一つの座標軸としての党派の重要性を強調

論争はブラディーン・クウィン優勢

サント=クロワの評価点：

問題点：

ブラディーンとクウィン：

スパルタ帝国：アテナイ帝国のような論争は生じていない

分析の枠組みと基本的な視角

党派：中心となる分析項目

論点：

前期の考察の対象：ギリシア人はペルシア帝国という異民族の大帝国に
どのように向かい合ったのか、

評価の基本的枠組み：

ギリシアの政治文化